

早川クリニック 皮膚科

早川 信一 先生



はじめに

湿疹は接触皮膚炎(かぶれ)、尋常性湿疹、内因性湿疹(アトピー)、脂漏性湿疹、ビダール苔癬などに大別されるが、原因がはっきりしない大部分の湿疹を尋常性湿疹と呼ぶ場合が多い。これらのうち接触機序が明らかな接触皮膚炎と紅皮症を続発した症例については、一時的なステロイド剤の使用もやむを得ないとする。今回、尋常性湿疹と乳児湿疹の紅斑に対し、漢方薬が著効した2症例を報告する。

症例 1 76歳 女性

初診の数日前より前額部および両側上眼瞼に突発性の瘙痒を伴う紅斑が多発した。接触皮膚炎の可能性はなく、原因が不明であることから、尋常性湿疹と診断した。前額部には黄色痂皮がわずかに付着した湿潤性紅斑が多発し、両側上眼瞼には表面緊張光沢のある浮腫性紅斑が見られた(図1)。組織学的所

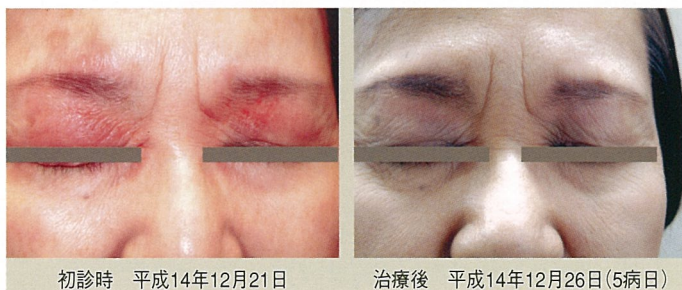


図1 症例 1

見として、表皮細胞間浮腫、水疱形成、血管拡張、小円形細胞浸潤などが考えられた。

前額部の湿潤性紅斑を海綿状態や真皮浮腫から生じる栄衛不和による水滯と考え、少陽病期にあたることから利尿作用のある茵陳五苓散7.5g/3×と、両側上眼瞼の表面緊張光沢のある浮腫性紅斑とリンパ球表皮内浸潤を太陽病期と考え、解表作用のある葛根湯7.5g/3×の内服を同時に開始した(図2)。内服5病日目には、湿潤性紅斑はほとんど消失し、眼瞼の浮腫性紅斑も著明に軽快した(図1)。

症例 2 生後1ヵ月 男児

初診の5日前、ミルクを飲み始めてから顔面・右耳・頭頂部に突発性の紅斑が出現した。接触皮膚炎の可能性はなく、乳児湿疹と診断した。

頭頂部に膿疱があり、この辺りに黄色痂皮が付着、さらに両頬部、右耳、後頸部に紅斑が見られたが、体幹、四肢には発疹を認めなかった(図3)。組織学的所見として、細胞間浮腫、表皮突起の延長、真皮の浮腫、血管拡張および血管周囲性の細胞浸潤などが考えられた。

紅斑・膿疱・黄色痂皮、真皮浅層の浮腫、表皮下水疱、ときに表皮内浮腫、血管周囲性炎症細胞浸潤を栄衛不和による水滯と考え、太陽～少陽～陽明病期に使用可能な利尿剤である五苓散1g/2×の内服を開始した(図4)。

内服25病日目には、黄色痂皮および紅斑が著しく減少し(図3)、黄色痂皮の部分については亜鉛化軟膏の外用のみで治療可能となった。

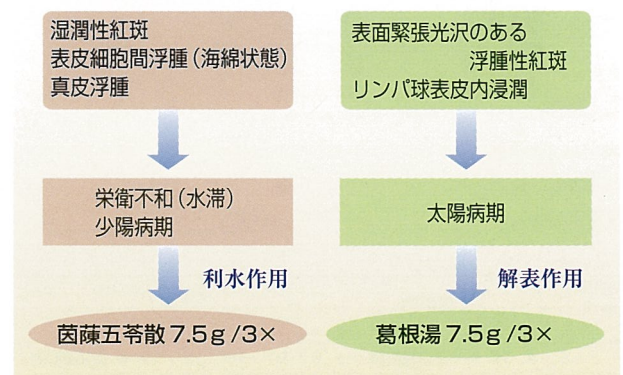


図2 現症の解釈と治療法の選択(症例1)

ける漢方薬の著効例

シンポジウム



図3 症例2

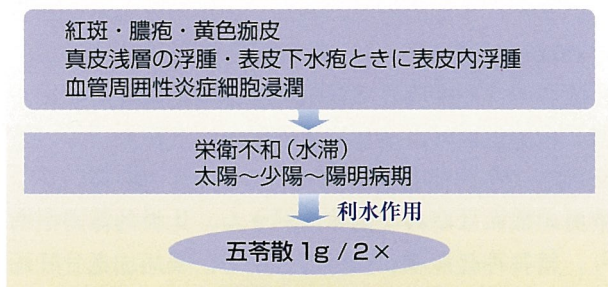


図4 現症の解釈と治療法の選択(症例2)

まとめ

尋常性湿疹のように原因が全く分からないままに、皮膚の病態を無視してステロイド剤を安易に使用することで、治療が困難になることも稀ではない。

急性湿疹では、紅斑・丘疹・水疱・痂皮等の状態が単発または混在するが、「湿疹三角形」を考えれば、炎症(熱)の強さと水滞(湿)の程度の間には強い相関関係があることが分かる(図5)。つまり、症例1の眼瞼部の浮腫性紅斑は太陽病期にあたることから、解表剤の葛根湯を使用、前額部の湿潤性紅斑は少陽病期にあたることから、利尿剤の茵陳五苓散を使用した。症例2は、症状が紅斑・水疱・びらん・痂皮と多岐にわたり、病期も太陽病期から陽明病期にあたることから五苓散を使用した。

今回報告した2症例は、湿疹の紅斑という点ではまったく同じであるが、局所の証を病期と照らし合わせると、治療の手段が若干異なることが東洋医学的に興味深く、またそれが皮疹の状態に適した治療になると推察した。

症例1で処方した茵陳五苓散の「朮」は蒼朮であり、

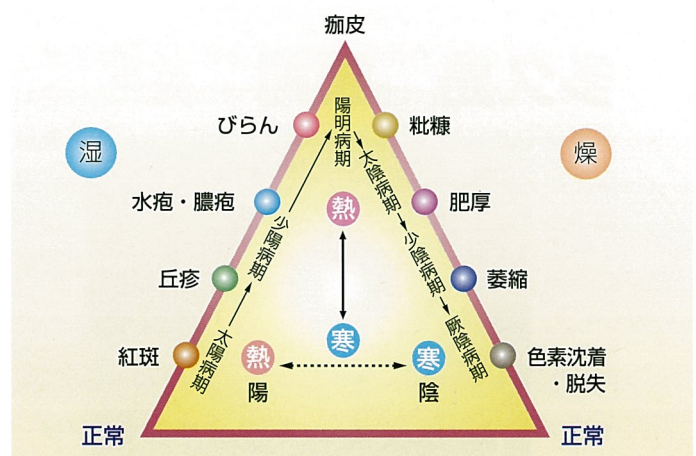


図5 湿疹三角形と局所の証

燥湿除湿的作用が強く、湿の盛んなものに用いることが多いとされている。一方、症例2で処方した五苓散の「朮」は白朮である。白朮は蒼朮に比べ補氣健脾的作用が強く、脾胃虚弱な者や乳幼児・妊婦などにも使いやすい。このように同じ朮でも薬効に違いがあることを考慮する必要がある。

ディスカッション

Discussion

寺澤 症例1のように顔面、前額部と眼瞼が発赤して間もない症例に葛根湯を処方されることは多いのですか。

早川 実際はそんなに多くありませんが、比較的新鮮で、実証、胃腸の丈夫な方の上眼瞼浮腫性紅斑には葛根湯が効くような印象を持っています。

三谷 皮膚科が専門でない者にとって、桂皮や麻黄は皮膚症状を悪化させるのではないかと考えがちですが、皮膚科の先生がこのように積極的に、特に桂皮の解肌作用を期待して使用されているのを知り、もう少し積極的に取り組んでみたいと思いました。

寺澤 そうですね。たとえば带状疱疹でもまだ発疹が出ていない初期には葛根湯が効果的であり、その後水疱を形成してくると、越婢加朮湯がよいというのが私の経験です。もちろん抗ウイルス薬との併用もよいと思いますが、貴重な症例を呈示していただき参考になりました。